

## 1. 特別支援学級の動向

インクルーシブ教育システムが推進されるに伴い、特別支援学級の重要性がさらに高まっています。平成24年に公表された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」では、多様な学びの場の一つとして、特別支援学級の環境整備の充実を図っていく必要があること、特別支援学級の担当教員は小・中学校における特別支援教育の重要な担い手であることが指摘されています。

また、平成29年に公示された新学習指導要領においては、特別支援学級において実施する特別の教育課程の編成に係る基本的な考え方について、新たに示されており、特別支援学級への注目が高まっていることが読み取れます。特別の教育課程に関する記述を見ますと、小学校学習指導要領では第1章第4の2の(1)のイにおいて、以下のように記述されています。

特別支援学級において実施する特別の教育課程については、次のとおり編成するものとする。

(7) 障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れること。

(4) 児童の障害の程度や学級の実態等を考慮の上、各教科の目標や内容を下学年の教科の目標や内容に替えたり、各教科を、知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校の各教科に替えたりするなどして、実態に応じた教育課程を編成すること。

(ア) では自立活動を取り入れることが規定されています。(イ) では学級の実態や児童の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を考慮の上、各教科の目標や内容を下学年の教科の目標に替えること、各教科を知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校の各教科に替えることが規定されています。

一方で研究の概要にもありますように、特別支援学級の増加からの担当者の不足や、人事異動のサイクル等により、特別支援学級担任の特別支援教育経験年数が必ずしも多くない場合があります。また、特別支援学級に在籍する児童生徒は多様であり、例えば知的障害を対象とした特別支援学級でも、在籍する児童生徒の教育的ニーズは様々です。このような状況から、特別支援学級担任が教育課程編成や授業の実施に困難を抱えていることがあり、特別支援学級担任をサポートするための方策を講じることが喫緊の課題です。

## 2. 本ハンドブックの今後の展開について

本調査研究から作成された特別支援学級ハンドブックの特徴として、教育課程編成や授業の学習指導案の例が豊富に記載されている点が挙げられます。いずれも、特別支援学級に関する高い専門性を有した本研究協力員の方々が、自らの豊富な指導経験をもとに書かれたものであり、非常に質が高く、参考になる内容です。なお、特別支援学級に関するハンドブックは埼玉県に限らず様々な地域で作成されており、各都道府県や市区町村教育委

員会等の Web ページにアップされている例が多くあります。地域によって、ハンドブック作成の切り口や考えが異なりますので、比較して読んでみると特別支援学級の理解が深まるかもしれません。

本ハンドブックに記載されている教育課程や学習指導案は、あくまで例ですので、いずれの教育課程や学習指導案も、目の前の特別支援学級にそのままでは適用できないと思います。各事例が児童生徒の実態をふまえて、児童生徒にどのような力を育てたいと考えて、教育課程や授業を設定したのかを読み取り、自らが担任する特別支援学級の児童生徒はどのような実態なのか、どのような力を身につけてほしいのかを改めて考え、事例から参考にできる内容を読み取るようにすると、効果的に活用できると思います。

また、本ハンドブックに記載された事例は、平成 29 年学習指導要領が公示される前の実践をもとに記述されています。例えば、新学習指導要領においては全ての教科等が、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理され、知的障害特別支援学校の各教科も目標がこの 3 つの柱で整理されたなど、様々な改定がなされています。新学習指導要領の改訂点をふまえた上で、本ハンドブックの活用を考えると良いかと思います。

最後に、本ハンドブックの活用方法を、各学校や地域で考えていくことが重要です。例えば、本ハンドブックを用いて校内や地域において、どのような研修プログラムを組み立てることができるかなど、個人で必要に応じて本ハンドブックを参照する以外の活用方法も考えると、本ハンドブックの価値が高まるでしょう。

そして、本ハンドブックの活用を超えた特別支援学級担任の専門性向上の方策についても、学校や地域で考える必要があると思います。どの資料も同様ですが、本ハンドブックですべての特別支援学級担任の指導上の悩みを解決することは難しいと思います。例えば、特別支援学級の新担任となった際には、本ハンドブックを用いて自学や研修により特別支援学級についての理解を深め、その後は校内や地域での定期的

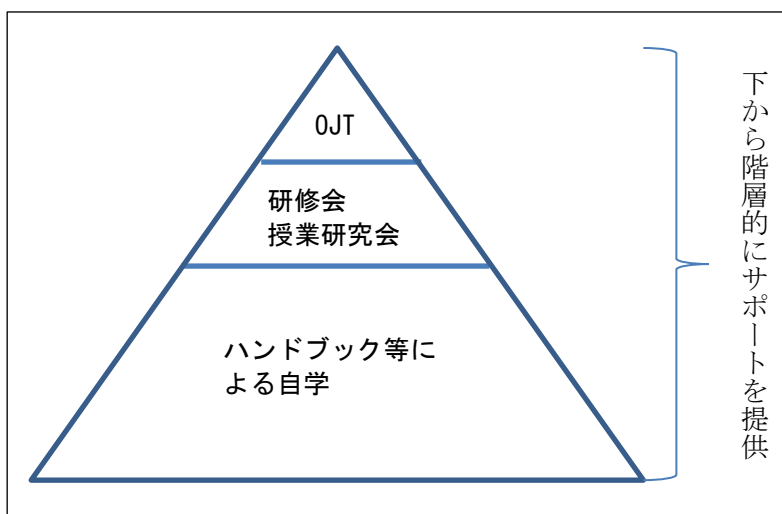


図 教員の専門性サポートの階層例

な授業研究により、特別支援学級の専門性を向上させるなど考えられます。教員の専門性向上のためには、階層的に様々な方策を各学校や地域で考える必要があるかと思います。

末筆となりましたが、「特別支援学級の教育課程編成の在り方に関する調査研究」の研究協力委員の皆様、埼玉県立総合教育センターの皆様、調査に関わられた皆様、お疲れ様でした。皆様の尽力により、素晴らしいハンドブックが完成したのだと思います。今後の本ハンドブックの展開、さらには特別支援学級に関する推進を祈念しております。